

第10回 国土文化研究所 オープンセミナー

「こどもたちの笑顔にあふれた こどもにやさしいまちづくり」

講演概要

1. セミナー概要

日時：平成26年6月20日(金)18時～20時

テーマ：こどもたちの笑顔にあふれた

こどもにやさしいまちづくり

場所：日本橋浜町Fタワープラザ3階ホール

講師：仙田^{せんだ} 満^{みつる}氏

こども環境学会代表理事

株式会社環境デザイン研究所会長

東京工業大学名誉教授



講師の仙田満先生

2. 講演要旨

冒頭で最近の新聞記事から保育園が迷惑施設として捉えられている事例が紹介され、150年前は外国人から「こどもの楽園」と賞された日本からこどもたちが元気に遊ぶ環境が失われていることに懸念を示されたうえで、「こどもの成育環境の視点」、「あそびやすい空間の構造」、「遊環構造を応用した環境」、「こどもの成育環境の再建」、「レジリエントなこどもにやさしい都市」の5つのテーマでお話をさせていただきました。

(1)こどもの成育環境の視点

- こどものあそび環境は「あそび場」、「あそび時間」、「あそび集団」および「あそび方法」の4つで構成され、特に「あそび方法」が重要。

- あそびには負のイメージもあるが、こどもたちは、こうしたあそび環境を通じて「身体性」、「社会性」、「感性」、「創造性」、「挑戦性」の5つの能力が開発されている。
- こどものあそび空間には「自然スペース」、「オープンスペース」、「道スペース(あそび場としての道路)」、「アナーキースペース(整理・整頓されていない空間)」、「アジトスペース(秘密基地)」、「遊具スペース」があり、これらが多く備わっているようなまちづくりが望ましい。
- 自動車やテレビ、パソコンなどの普及により、この50年間で、あそび空間は1/100に減少し、世界的にもきわめて少ない。
- ベビーカーの普及や学校・住宅の高層化、生活のなかのIT化などにより、外あそびから内あそびへと変化している実態もあり、こどもたちにマイナスの影響を与えている。
- 公園も防犯などの理由で利用者が減少しているが、一方でプレイリーダーがいるプレイパークは利用が増えている。あそびにとっては空間のみならず「人」も重要な要素である。

(2)あそびやすい空間の構造～意欲を喚起させる環境の構造

- 遊具によるあそびは「機能的段階(あそぶ)」、「技術的段階(じょうずにあそぶ)」、「社会的段階(みんなであそぶ)」と発展していく。
- あそびやすい空間の大切な構造として「遊環構造」を提唱している。あそびの原点として鬼ごっこがあり、あそびながら逃げ回る回遊性のある空間であることが大切である。ある研究者によればあそびの4要素には「競争」、「模倣」、「偶然性」、「めまい」(例えばお化け屋敷やジェットコースター)があり、これらの要素

を回遊しながら体験できる構造が「遊環構造」である。



仙田先生のご講演

(3)遊環構造を応用した環境

- ・「遊環構造」を応用したあそび場の設計事例として「野中保育園」(1972)、「ゆうゆうのもり幼稚園」(2005)、「四街道さつき幼稚園」(2007)などがある。
- ・最近には特に「すべての校庭・園庭は自然豊かな林と農地を持つ」をコンセプトとした設計を行っている。
- ・子どもに多様な体験を与える仕組みとして「コレクティブハウジング」などが注目されている。高層住宅を低層で中庭を有するような集合住宅に転換すること、集合住宅のなかにコモンスペースを有することなどが大切である。
- ・ドイツには子どもだけで運営する小さな都市「ミニ・ミュンヘン」のような取組も行われ、子どもたちがまちづくりに参画する仕組みが工夫されている。

(4)こどもの育成環境の再建

- ・失われてしまったこどもの育成環境を再建するため、「建築学会」、「子ども環境学会」、「日本学術会議」などで様々な取組が行われている。
- ・なかでも「子ども環境学会」は、従来の学会でこどものあそび環境改善に向けた活動が十分ではなかったことの反省から設立したものである。

(5)レジリエントな子どもにやさしい都市

- ・子育てしやすい自治体のランキングなどが発表されるなど、子どもにやさしい都市の評価が行われるようになってきている。
- ・子どもにやさしい都市づくりをさらに推進するため、「子どもが元気にあそび育つ環境の整備に関する条例(案)」を提案し、条例制定の運動を行っている。
- ・東日本大震災の被災地においても、「子どもが元気に育つまちづくり」のための国際提案協議「知恵と夢」の支援を行った。
- ・まとめとして、いま、日本の子どもたちの育成環境は危機的な状況にあるが、これを基本認識として、困難を乗り越えることができる子どもが育つ社会を日本は目指すべきである。



会場のようす

3. 質疑応答

ご講演の最後に、会場の皆さんからたくさんのご質問をいただきました。

(質問)

細街路(路地)を子どもたちのあそび場として残すべきとのご意見に共感したが、一方で、防災の観点からは路地はなくす方向にある。どうしたら路地が残せるか。

(回答)

現実問題として細街路は防災や住宅の設計の面から問題はある。車と人がもっと柔軟に共存できるよう、道路行政や警察が考えることも必要であろう。



会場との質疑応答

(質問)

こどもにやさしいまちづくりを推進すると出生率のアップにもつながるのではないかと。

(回答)

こどもに対する投資はお年寄りに対するその1/16 という統計もある。目先の選挙対策としては高齢者に目が向くものかもしれないが、こどもへの投資は明るい未来につながると考え、幸せなこども時代を過ごせるような社会にしていけば、出生率もあがるだろう。

(質問)

2020年にオリンピックが開催されるが、こどもとスポーツの関係について何か知見があるか。

(回答)

スポーツは困難を乗り越える人材を育成するという点であそびとの共通点が多く、人間形成上の重要なモーメントであろう。スポーツの場、健康の場、あそびの場にはつながりがある。

(質問)

現在住んでいるところは子育てをしやすいまちづくりをうたっているが、実態は疑問も多い。どのようにアプローチすれば改善されるか。

(回答)

こども向けの部署＝保育行政となっているが、行政はそれぞれ縦割りとなっているなかで、こどもの視点で横串をさすような施策を展開していくことが必要である。「こどもが元気にあそび育つ環境の整備に関する条例(案)」のような運動を働きかけていくことも大切である。

(質問)

親がこどものあそびを知らないことも大きな問題である。まず親の教育が必要ではないか。

(回答)

指導者の育成など、おとなへの働きかけも大切である。プロとしてこどものあそびをケアする人材の育成や仕組み作りが重要である。

3. おわりに

少子化が進む中、こどもたちの成育環境に関する関心は高いものがあります。今回のセミナーでは、こどものあそび環境に関する研究の第一人者である仙田先生をお招きしてお話を伺いましたが、会場には教育・保育関係者、まちづくり関係者、学生など78名もの方々にお集まりいただくことができました。

私たちはコンサルタントとして、まちづくり、道づくり、川づくりなど様々な社会資本の整備に取り組んでいます。そのなかでは小さなこどもたちをはじめとする多様な人びとの利用を考慮したユニバーサルデザインは必須となっています。しかし従来、こどものためと称したデザインも、必ずしもこどもの視点からではなく、おとなの都合で考えてきていたのではないのでしょうか。そんな思いから開催したのが今回のセミナーでした。

仙田先生からは、日本のこどもたちの成育環境の危機的状況と、それを改善していくことの重要性について、様々なデータや事例をもとにわかりやすく解説していただき、「こどもの視点とは何か」を理解するための多くのヒントをいただくことができました。

株式会社建設技術研究所では、現在、こどもの視点からみた水辺づくり、都市づくりなどの研究にも取り組んでいます。このセミナーで得られた知見を今後の企業活動に生かしていくとともに、引き続き「暮らしに役立つ^{めぢから}眼力を養う」ための機会としてのオープンセミナーを企画し、皆さまとともに現代社会の様々な問題を一緒に考えていきたいと思っています。